

記憶を絶やさない

山崎学園富士見中学校一年（清瀬小学校出身） 大熊 詩夏

私がこの広島派遣に参加したいと思った理由は、原爆の記憶を受け継ぐ手伝いをしたいと考えたからだ。

私の家計はルーツをたどるとすべて福岡県につながる。いつか小学校の授業で原爆について学んだ時、「長崎に原爆が落とされた時、もし福岡の天気が悪かったら福岡に落ちていたかもしれない」という話を聞いた。私は少し怖くなり、自分が生きているのは偶然なのかと思った。そんな中、このピースエンジェルズの事業を知り、応募することを決めた。

以前、新聞に原爆の語り部が引退するという記事が載っていた。現役の語り部さんの高齢化が進み、証言できる人が少なくなっている。このままでは次の世代に原爆の恐ろしさを伝えることができない。そこで私も協力したいと考えたのだ。

近年、ウクライナやイランなど戦争のニュースが絶えない。なぜ戦争をするのだろう。私たちが戦争を意識するようになったきっかけとして、谷川俊太郎さんの「生きる」という詩がある。その詩には私たちの当たり前が綴られている。それを読むと、「私の当たり前が当たり前じゃない人もいる」ということに気づかされる。特に「今どこかで兵士が傷つくということ」の一文は、本当にその通りだと思った。平穏な生活の中に隠された、恐ろしい戦争のことを、現代の若者にも引き継がなければいけないと強く感じた。

2026年は、戦後80年という節目だったため、その単語をニュースや新聞でよく目にした。節目で戦争について考えることも大切だが、日常的に戦争について考える機会が減っているなと私は思った。誕生日じゃなくても、自分の年齢を意識することはあるだろう。それと同じで、普段から戦争について考えてほしいと私は思う。